

日本文学の研究にたずさわるかぎり、はるかな目標であっても、日本文学の歴史像を何等かのかたちで明確なイメージとして把握したいというのは当然な欲求である。そういう欲求をもたない研究意欲が本物であるかどうか、まず疑いたくなるのは、私の偏見だけではない。文学の研究はまず何より文学への切実な関心と愛を出発点とする。それだけでなく、それが研究主体の内的要求と深く結合していなくてはならないし、それは研究者の「生活の探求」でもあるはずである。だからその文学は文学としては研究者の内部に生きているものでなければならぬ。伝統とは、生きている文学のことである。文学史は過去形で形象化された文学のことだ。研究者がそれぞれの時代に即して文学史像を夢みるのは当然のことである。それを一切に不問に附して、作品と作者とを時間的系列に陳列すること

で文学史の叙述と考えるような人は、もはや存在価値がない。もしいるとしても、かれはおそらく時代区別という最も困難な危険な課題の存在にも気がつかない人だ。時代区分を政治史や経済史の区分と関連するであろが、それに依拠してしまえない価値判断の領域をもっている。外的徴表を列挙

文 学 史 像

国 崎 望 久 太 郎

この時、その文学史像は未来に媒介されたものにならざるをえない。未来の文学像への予想を全く欠いた文学史像がありうると考えるのするだけではすまない文学価値判断がある。それをどう交錯せしめるかが、実はそれぞれの文学史像を成立せしめる根拠になるのだ。は間違いである。

実際は無意識のうちに、研究者の文学観がその史的叙述を拘束している。この被拘束性をどれほど十分に深く自覚しているかが、その叙述の客観性を保証するものになるのだ。生々した文学史の叙述がどんなに困難なものかは、想像にあまりがある。博大な知識のみではどうすることもできない限界がそこにあるのである。文献資料を断念することに通じよう。しかしそれだけでは文学の研究にはなれない。また文学享受の楽しみだけでもどうにもならない。単なる文学愛好者を研究の領域に誘いこむ媒介項が必要である。おそらくそれは文学理論の体系的把握以外にはない。文学研究の方法論あるいは文学理論そのものへの追求が必要だ。そしてそれが最も欠けているのが学界の現状である。